大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

翻訳
エルンスト・トレルチ著「キリスト教の教会と集団の社会理論」（1）

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-11-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高野, 晃兆, 帆苅, 猛
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00008099

翻訳　エルンスト・トレルチ著
「キリスト教の教会と集団の社会理論」〔I〕

Die Übersetzung von Ernst Troeltsch :
„Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen"〔I〕

高　野　晃　兆*,　帆　苅　　猛**

Teruyoshi TAKANO*** und Takeshi HOKARI****

(昭和53年9月1日受理)

第1章　古代教会における諸基盤

第1節　福　　音

原始キリスト教は古代後期及び帝政時代の社会運動から直接影響を受けなかった

キリスト教の全体的な基本的方向を社会問題との関連において理解しようとする場合，決定的なのは，イエスの説教と新しい宗教教団の形成とは決して社会運動の創造ではないということ，即ち何らかの階級闘争から生じたのでもなければ，或いは階級闘争にむけられていたのでもなければ，また古代社会の社会的大変動に決して直接結びついていたのではなかったという認識である．次の〔五つの〕事実はもちろん確証されている．〔一〕イエスは基本的には虐げられた人たちや小さき人たちに呼びかけた．〔二〕イエスは富を魂にとって危険なものとみなしまたユダヤの祭司貴族並びに支配的神学者世界に敵対した．〔三〕同様に初代教会は信仰者を事実基本的には都市の低い身分の人たちのうちに求めまた見出した．〔四〕二世紀になってようやく教育を身につけまた資産のある社会的上層の人たちがゆっくりと信仰者のなかへ流れこんで来た．〔五〕こういうことが教育・学問を身につけた人たちや資産のある人たちと強い摩擦なしに行なわれたわけではない．しかし同時に別の次の〔三つの〕事実も確証されている．〔一〕新約聖書を中心としたその内外の古代キリスト教の伝道及び教化に関する文献全体が原理的な社会的問題提起については何も知らないということ，〔二〕どの場合でも中心点にあるのは魂の救い，一神教，死後の生活，純粋な礼拝，正しい共同体組織，〔キリスト教信仰の〕真実性の実践的証明，神聖性に関するきびしい根本原則の問題であるということ，〔三〕はじめから階級の相違は存在せず，この相違はむしろ永遠の救いと内面的な財についての大いなる問題のなかで消されてしまったということ．特にあらゆる弁証的な(apologetisch) 活動は社会状況の希望的な改善或いは社会的疾患の治療をかかげて行なわれたのではなくて，純粋に神学的・哲学的な論拠或いは倫理的論拠をかかげて行なわれた．倫理的論拠としては

---

*一般教養科

**日本バプテスト同盟寝屋川キリスト教会副牧師

***Department of General Education

****Vice-Paster of Neyagawa Christ Church, Japan Baptist Convention

キリスト者の冷静さ，誠実さ，活動性及び市民としての有用性が挙げられる．イエスが出発点とし，また教団全体が待望していたところの来るべき神の国の大いなる救済期待〔の内容〕も人間の業にかわって神の力がもたらす完全な社会状態という様なものでもなければ，或いはこの世の社会の不幸〔な人たち〕に幸福な，この世の不幸を償う様な或いは全く逆転させるような来世――現在支配的な立場にある人たちに対して財なき人たちのためにこういう来世が保証されていると考えられている――について希望をつながせるという様なものでもなくて，神の王国というのは至るところでまず第一に純粋に神によって支配される世界の倫理的並びに宗教的な理想状態である．この神によって支配される世界においては純内面生活のあらゆる真の価値が本当に認められ，そして力を得るのである．そして後になってこの来たるべき救済という思想がキリストの生と死においてすでに完成された救済という思想の背后に後退するとき，ここでも救済という財は純内面的な，倫理的なそして精神的な財として示されたのであった．こういう財の場合には苦痛なき浄福に至ることがまさに自明の完成であると考えられている．これがそこから出発されなければならない基本的事実である．

この基本的事実は所謂グノーシス主義の大部分或いはミトラの密儀の様な平行的に当時存在した祭儀や宗教的結社が社会的な階級的福音として或いは社会的な被害の克服としてふるまうのではなくて，高度な神学をもった制度，強い霊感を与えられる制度，確実な魂の救いの制度として振舞っているということにおいて更に説明されまた証明される．グノーシス主義者のなかには共産主義的なグループ，とりわけちなみにキリスト教とは全く縁遠いカルポクラテス主義者がみられるが，これも自分たちのサークルにかぎられ，そして普遍的な社会政策的改革のプログラムではない．二世紀以来超越的なるものへの関心が高まり，〔他方〕組織的な社会改良への動きは衰えている．こういうことはなにもおどろくべきことではない．古代世界はペロポネソス戦争以来またグラックス兄弟の改革以来〔社会を〕根底からゆさぶるような階級闘争を体験したし，そしてその場合民主主義的な政策と哲学的反省並びに文学は非常に広範囲に及ぶ社会政策的，経済的，国家社会主義的，共産主義的並びに無政府主義的理想を生みだしたが，ヘレニズム帝国とそれに続くローマ帝政とともにこういう熱に浮かされた様な戦いの時代は大体において終り，秩序と繁栄が回復し，大変動や零落，国民の貧困化を招く搾取政策と職業の不安定性とが減少したのであった．帝国の鉄の様な堅固さは社会的並びに政治的秩序に関する思想全体に滲透している．そして自由な運動は自分の内面生活，即ち倫理的並びに宗教的反省の方向へむかうのである．平和の結果としての奴隷市場の減少が中産階級を再び抬頭させる．長い間非常に熱心に探し求められた社会的正義は皇帝の手中にある．完全な理想は太古の時代においてのみ実現されたとみなすところのストアの大いなる人道的な学派は一部は状況と種々の制約に従うことを教え，一部は慈善改革のための皇帝の立法に影響を与えている．なるほど帝政時代の社会史はまだほとんど研究されていない．そして古代社会の解体の過程はこの帝政時代には全くゆっくりとしていた．しかし帝政時代の最も重要な社会史的な出来事，つまり農民身分の減少，奴隷の農奴への移行，資本の大土地所有への移転，〔これに伴う〕海岸都市から内陸への重点の後退，軍隊制度と官僚制度の完全な変化，最終的には自然経済への復帰，これらの出来事と初期のキリスト教の教団はほとんど関係しない．なぜなら初期のキリスト教の教団は最初数世紀の間都市の下部層並びに都市のしだいに再び落ちつきをとりもどした営利生活者に属し，その重点を社会的には分裂ということがほとんどみられない東部にもち，真にプロレタリア的特徴というよりもむしろ中産階級的特徴をもち，新しい世界が来るのを期待しながらも，平安と市民としての有用性に熱心に心をくばっている．かつまた農民は少くとも擬制的に市民でありそして農民の利害の戦いが市民の党派間の戦いのなかで一緒に戦われたところの古代においては，近代の意味での工場労

働というものが存在しなかったところの，それ故自由な身分の賃労働者というものが存在しなかったところの古代においては，大きな社会的解放運動，新しい階級の発生という様なことにはなりえなかった．戦いはたえず政治的―民主的な戦いでありそして土地の分配と借金の軽減をめぐっている．最下層の人たちの奴隷層としての存続はその場合すべての人たちによって前提されている．奴隷の運命にあるものを教化するということは実際には解放を意味しなかった．帝政とともにはじまる落着きということを度外視しても解放を必要とする階級運動というものは欠けていた．さまざまな哲学的理論や国家小説〔国家生活を国家哲学的観点に立って小説風に叙述したもの〕はなるほど倫理的にも内面的にもいろいろな対立の緩和を意味しているが，新しい階級の実際的な発生を意味していない．教団の社会的構成もまた純粋に階級的に制約されたものとしては表象されえない．もちろん教団は主として長い間奴隷，奴隷の身分から解放された者並びに手工業者から構成されていた．この場合しかしF. Overbeck〔1837―1905, スイスの神学者，新約及び古代教会史専攻〕が正当にも認めている様に，そもそも存在した奴隷の数を考慮に入れるとき，また奴隷を〔教団に〕受け入れるにあたっての慎重さを考慮に入れるとき，奴隷の参加を過大視することは許されない．いずれにしても解放されることを望んでいる奴隷を教会から遠ざけておくために明らかに配慮がなされている．〔他方〕しかしすでにはじめから上層部の同胞というのは欠けてはいなかった．彼らはおそらく主として必要な資金を調達しまた集会が可能な様に手配した．ドミチアヌス帝〔在位81～96〕の時代にキリスト教は最高の宮廷社会にまで迫った．プリニウス〔61頃―114頃, ローマの政治家，ビテニアの総督〕の有名な手紙は「すべての階級の多数の者」(multi omnis ordinis)という言葉をはっきりと口にしている．コンモドウス帝〔在位180～92〕以来上層部の人たちの加入が大変増加している．これら一切のことは，これは本質的に宗教運動であるという前提の下で理解されるのである．そしてこれら一切のことは，これは《プロレタリアの階級運動》である，或いはこれは《古代の社会主義の宗教的改造》であるという意見に対する明確な反対証明である．

かくてキリスト教の抬頭は社会史からではなくて，古代の宗教史から理解されなければならない．宗教的な生は他の生のなかへ絡み合ってもやはりその固有の発展と固有の弁証法運動(Dialektik)をもつのである．民族の独立性の喪失と共に当然生じた民族的諸宗教の瓦解，当然いろいろの祭儀をもごったまぜにすることになる民族の混合，国家や出生に関係のない純粋に内面的な密儀祭儀の成立，古い民族の地盤からときはなたれた宗教的断片の混合，民族宗教への種々の同化を伴う教養ある哲学的宗教，世界帝国による普遍的な世界宗教への欲求―――皇帝崇拝はこの欲求を非常に外面的にしか満足させなかった―――，前例のないほど豊富な批判と自己深化を伴った四百年の精神史のなかでの倫理的思考の非常なる深化と内面化，これら一切のことと結びついて，多神教・その神話・その祭儀の解体，永遠の価値を提供する究極的な宗教性への要求，これら一切のことは古代の終結として，生産性と魅力ある宗教を伴える新しい時代の導入を意味する．古代は，いろいろと理由をあげられるが，しかし究極的には宗教的思考の内面化と倫理化から生じる，民族宗教の解体とともに，そして四方八方から流れこんでくる力強い宗教的な新しい形成〔運動〕のなかで終りを告げる．しかしこれらすべてのことの究極的な根拠は宗教思想そのものの固有の独立した因果性である．こういう状態からキリスト教は現われたのであった．そしてこの状態の遺産をキリスト教は教会の大きくて広い貯水槽のなかへ集めたのであった．つまりキリスト教は自分の指導的な根本思想のまわりにこれらすべてを―――非常にうまく―――集めたのであった．

しかしキリスト教が古代の内的な宗教的発展からこの様に理解されうるとすれば，そのことでもって同時にキリスト教の最初に言及された下層階級への方向とこの下層階級からキリスト教が出現して来たこととが説明される．〔下層階級への方向という〕この態度は社会的な〔階級分化等の発展

の〕過程から形成されたものとして説明されるのではなくて，宗教的な新しい形成の本質から説明される．かかる新しい形成は〔次の〕二重の方法で行なわれる．〔一〕かかる新しい形成は教養と反省の点で高い次元から出発しそして批判という形をとりまた思弁という形をとって四方にひろがっていく．かかる新しい形成は，現実的な宗教的な生の内容が批判とか思弁という形式の中へ巻きこまれるのか深ければ深いほど，それだけ一層意義あるものとなるのである．だからプラトニズムもストアも一種の宗教的な新しい形成である．しかしプラトニズムとストアは本質的にはやはり反省と理性的論証であって，それ故啓示信仰の特に宗教的な力を要求していない．プラトニズムもストアも自からの弱さを自覚して，一部はそれらがただ新解釈をつけるにすぎない古い民間信仰にくっついたままであったり，一部は各個人がそれらプラトニズムやストアとの静かな論争のなかで各個人自身に対して明らかにする抽象的な証明の力によりかかっている．〔二〕それに対して，本来的に創造的な，教団形成的な宗教的基盤は下層の〔人たちの〕業である．ここでのみびくともしないファンタジー，そぼくな情緒，くよくよしない思想，生き生きとした力とはげしい欲求とが結合されるのである．そしてそこから神啓示への絶対的な権威信仰，素朴な献身，非妥協的な確信が形成されるのである．ただここに存在するのは貧困であって，たえず〔物事を〕相対化する反省的文化は欠如している．共同体を形成する大いなる啓示は時々かかるサークルから出現したのであった．そしてこの様にして形成された宗教的サークルの意義と発展能力とはたえずかかる素朴な啓示において与えられた原動力の力と深さに依存している．また他面この原動力を絶対化しまた神格化する信仰の確信のエネルギーにも依存している．もちろんかかる形成物に本当に深い内的な力がいつも帰属しているとはかぎらない．しかし本当に深い内的な力が帰属している場合には，素朴さが最も強い力を発展させそして最も深い認識をみいださせるということは素朴さの特性であり，また素朴さの反省的文化に対する優位性である．その場合でもその後の発展において最初素朴な形で与えられた生の内容がそれと並んで存在している反省的文化のきわめて高度な宗教的力と結合しまた絡み合うということが起こらないとはかぎらない．もし結合し・絡み合わない場合には前者は後者によって打ち砕かれるであろう．

かかる結合はキリスト教においては二世紀以来ますます強いかっこうであらわれた．このことはキリスト教においては深い宗教的な力が問題なのであるが，この力を打ち砕くのではなくて，実のらせまた発展させたのは反省的文化であったということの明白な証拠となった．しかし初期のキリスト教はあらゆる素朴な宗教がもっている民族的特徴と民族的拘束性を示している．それ故キリスト教については帝政時代の大いに評判となっている老衰はあてはまりえないということになる．イエス自身は平民の出であって，彼の福音は明らかにガリラヤの素朴な農民的―平職人的な状況の痕跡を帯びている．貧しい人たちと虐げられた人たちとだけが彼の福音を容易に理解するが，富める人たちや神学者たちには彼の福音は解されないのである．なぜなら〔一〕彼らは自分たちが困っているという感情を持っていないからであり，〔二〕彼らは彼らの知恵を用いて物を見る場合，ただ木を見て，森を見ていないからであり，〔三〕彼らの心は無制約的な犠牲を捧げるにはあまりにも多くのことごとに拘束されているからである．けれども神のところには不可能ということはない．富める者も幸福になりうるのであり，律法学者も神の国に近づきうるのである．かかるサークルからイエスの最初の弟子たちとかの復活した人への信仰をめぐって集められた最初の教団―――これはところで財産なき人たちとは描かれていない―――とが出て来たのである．このイエスへの信仰を伝道的世界宗教にしそしてキリスト礼拝を新しい教会と神崇拝の基盤にした人，つまりパウロも，本質的に組織的に活動をし，神秘的―宗教的な傾向の性質の人である．即ち彼の性質は反省はするが，実際にはむしろ瞑想的であり，そしていづれにしても真の学問の，批判の並びに高度の世界文

化の精神とは全く疎縁である．彼は 》帝政時代の非文学的な層に属する非文学的な人間である．しかし霊の力のある人としてこの層を突きぬけて聳えておりそして同時代の教養世界を悠然と眺めている．体系的なものとしては萌芽の形であちこちにみられるだけであって，このことが彼の才能の限界を示している．つまり体系なき宗教的なるもののうちに彼の大きさの秘密がある《.更にそれに劣らず古キリスト教の文学全体は民衆伝承の特徴をもった，庶民的な，教養世界から長い間見向きもされずまた影響も与えられなかった民衆的文学であり，民衆の言葉のままで語られまた民衆の欲求とファンタジーに関連づけられている．古キリスト教文学の伝説的な性格は，すぐれたそして信頼のできる伝承と結びついて，民衆伝承の特性を示している．福音の創造，パウロ書簡，すでに教養世界に近づいているヨハネの神秘知(Mysteriosophie)といった高度なものも含んでいるが，古キリスト教文学は同時に民衆文学の貧弱さをも示している．しかし一世紀後には所謂弁証学者〔の抬頭〕と共に文学的上層部への，この上層部の言語及び思想世界への上昇が始るのである．この際弁証学者たちは彼らなりにキリスト者の素朴さ，貧しさと教養のなさを強調しそしてそこからキニク学派のスタイルで人気を得ようとしていることによって，〔本来キリスト教が下層階級から発生したものなら，わざわざ下層階級に人気を博するための努力を必要としないのに，努力していることによって〕〔先に述べられた揺籃期のキリスト教の〕下層の人たちへの方向というのは何らかの階級思想或いは千福年説的社会主義の意味で考えられたものではなかったということを，弁証学者たちも示している．貧しさと素朴さとが真理の基盤なのである．そして後にルソーはこの真理を 》自然的《 真理とみなした様に，見せかけや洗練された教養はこの真理を見たり或いは信じたりしないのである．

キリスト教と社会史との間接的関係

もちろん以下の様なことが主張されうる．〔一〕古代の大いなる宗教的転換こそ社会的戦いの成果そのものに他ならないこと，〔二〕明らかにオリエント並びに西洋における民族国家の崩壊がこの全過程を準備すること，〔三〕幾世紀にもわたる大いなる社会闘争のなかでの〔社会の〕自己衰弱とそこから生ずる測りがたい不幸とが宗教的救済思想に対して人々の心をひらくこと，〔四〕社会的な物事に関して何か新しいものを創造するということの断念とローマ帝国の世界支配への服従とが個人をして自分の内面生活と個人道徳の洗練化へとむけさせ，社会理想を超越的とさせそしてその間に希望なき時代についての慰みを個人と個人からなる自由なサークルをして高い宗教性のうちにみいださせること．

〔なるほど〕大衆の量見の狭さと利己心，支配階級の犯罪的奔放性，これらによる多くの大いなる計画の坐礁は人間の罪性と不完全性を自覚させる．永遠をめざして建設されそして宗教的にも祝福された政治体制の没落と結びつけられた運命のはげしい転変がもっと高い次元において存続する価値への願望を生じさせる．

〔しかし〕これはもちろんまず隷属的な農民による，次にプロレタリアの賃労働階級による近代的な解放運動とはほとんど関係のない戦いである．これはつまり古代ポリスの分解でありまた官僚制的大都市のなかでの古い〔ポリス時代の〕自由の消滅であり，それ故古い生活関心の破砕であり，またいろいろな重圧である．そしてこの重圧が思考を内面的な生活目標にむけるのである．オリエントと西洋ではこれが実情なのである．こういう雰囲気のなかで諸階級と諸身分の水平化，内面的並びに宗教的価値の次元での諸階級と諸身分の一体化がおこなわれる．古代の大いなる宗教的終結転換はまた大いなる社会的危機の結果であるということは疑われえない．つまりこの大いなる危機のなかにあっては社会理想は人間の労苦や反省によっては達成されえないものとして示された．そし

てこの危機の大きさの故に人々は独裁君主制による秩序に喜んで身をまかせた．即ち人々は独裁君主制に外的なものをまかせそして自からのために魂の自由を獲ちとりまた完成したのであった．このことはプラトニズムとストイシズムの後期の発展にあてはまり，無数の宗教的革新運動にあてはまり，特にキリスト教の確立にもあてはまる．つまりこのことはキリスト教のユダヤ教時代の準備にもあてはまる．特に上層部がこれらの影響の下にあるが，制度の根絶，古い信仰に対する不信，知恵の教師の倫理的—宗教的宣伝は下層部に向っても働いておりそしてここに存在する情熱をもったエネルギーをして新しい道を探求させている．上層部の場合には地盤は内面化されたそして普遍的に人道的な定理の方にむいているが，下層部の場合には地盤は新しい内面化されたそして普遍的な祭儀の方に向いている．しかしかかる社会史的な制約はやはり間接的な制約にすぎない．あらゆる精神の運動を単に社会的な運動の結果として，そしてとくにあらゆる宗教を社会状況の超越的なものへの反映として表象しうるものだけが社会状況のなかに宗教的転換の直接的原因をみるであろう．しかし実はあらゆるとらわれざる宗教研究は宗教的理念の相対的独立性を示すのである．つまり宗教的理念は固有の内面的な弁証法運動と発展力をもちそして人間の希望と緊張の崩壊したかかる状況を利用し，自由に振舞えるように与えられた空間を自分の理念と感情で支配しようとするのである．すでにギリシャの啓蒙批判においてまた新しい思弁的——神教的刺激による応答において並びにその土着性を奪われたオリエントの諸宗教の融合した形態において独立的にこの弁証法運動は展開された．そしてこの弁証法運動は次にその完全な展開の時代が到来することによって，倫理的並びに宗教的革新の関心をますます強く発芽させるのである．弁証法運動はこの様にして地盤を獲得することによって，それは自身の本質に由来するところの，そして世俗内的な生の価値にかわって純神秘主義的並びに宗教的価値を加速度的な度合でもちだすところのたくさんの帰結をもたらした．こういういくつもの努力を集中しそして蓄積したものが疑いもなく古代後期におけるキリスト教の固有の業なのである．そしてこのことにおいてキリスト教はすでに始まった強力な宗教的〔形成〕過程を継続するのであるが，その際新しい祭儀と新しい啓示信仰を伴える真に強力な大衆的な宗教形成のうちにキリスト教の新しい中心がおかれている．しかしこれら一切のことは社会的な発展の間接的影響でしかすぎない．一切の固有なものそして本質的なものは宗教的な理念の固有の弁証法運動から生じる．特に宗教的な理念が提示するものは超越的なものへと変化した社会理念ではない．つまり平等と自由を享受でき，苦痛を知らずそして生の満足を感じることのできる世界を神の奇蹟的〔な力による〕干渉———人間の活動は社会理想を実現させるには不十分として証されたことによって———によって実現させることの約束ではない．むしろ宗教的理念が提示するものは現世的な社会理想，政治的並びに経済的価値一般の断念でありそして宗教的霊的平安という，人間愛という，神を中心とした共同体という〔宗教的な〕財への転向である．この〔宗教的な〕財はむつかしい行為や組織を基盤にしていないので，すべての者に可能なのである．宗教的理念が提示しうるものは価値一般の変化であって，現世的な価値にもとづく人間にとっては達成されえない組織を〔実現されることを期待して〕神の力に割り当てることではない．このことがストイシズムや救済祭儀の場合にあてはまることは全く明らかである．このことはまたキリスト教の神の王国の意味でもある．Eudämonieという思想或いはGlückseligkeitの倫理的原理，つまり倫理的な品位と政治的経済的幸福（Glück）の一致〔という考え方〕は変えられた．リュケルト〔Hanns Rückert 1901—教会史，特に宗教改革の研究者〕の言葉では次の様に言われる《Glückseligkeitを〔二つに〕ちぎれ，そして各人に〔どちらか〕一方を与えよ．私にはSeligkeit〔精神的幸福〕を，そしてGlück〔物質的幸福〕を欲するものにはGlückを与えよ》．Seligkeitそのものはしだいに彼岸的となりそしてまさしくそのことによって地上的なGlückは無用なものとなる．救われざる罪或いは現世で克服されな

い物質的拘束性の理念が現世内的な生の価値を剝ぎとるのである．かくて宗教的な理念は自から世俗的な差異を中和する．つまり政治的―経済的財の価値を無価値にすることによって宗教的な理念は人種，民族，階級の障壁をとりはらうのである．宗教的理念はこういう障壁の故になやんでいる人たちに対してこそむしろ強い引力を発揮するということは当然である．そしてキリスト教はこういう障壁の圧力を最も強く感じている人たちの間に信奉者をまず求めまた見出さなければならなかったということはいづれにしてもごく自然に理解される．しかしその場合にも次の簡単な事情が忘れられてはならない．つまりもともと低い階級の思考世界や感情世界へむけられる民族運動はその運動を支持する人たちの結合とそれをひろめていくエネルギーをいつも本質的に下層の人たちのうちにのみ見出しそして上層部に達するのは非常にむつかしい，それ故結局受容者を本質的には下層の人たちのうちにのみ見出しうるであろう，そしてその弁証(Apologetik)においてこの自分たちの困窮した状況から徳をつくるのであるという事情である．しかし〔キリスト教の場合には〕上層部の同調者―――上層部に無数の同調者が存在した―――を得ようという試みははじめから欠落してはいなかった．そしてついにはこの試みに大いなる成果が与えられるのである．同じ様に無視できないのが次の簡明な事実である．つまりその信奉者を国家祭儀に対してまた社会を支配し，祭儀と関連する慣習に対してきびしい対立のうちにおく宗教はその信奉者を教養や財産の点で体制と結びついたサークルのうちには，例外的にしか見出すことができないという事実である．こういう理由から例えば〔十九世紀後半の〕オーストリアのローマ〔教会〕よりの分離運動(Los-von-Rom-Bewegung)は本質的に下層階級のなかでうごいている．つまりこの運動は社会の指導的階層をつつみこむ宗教体系とは結びつかないのである．その限りではこの様な宗教運動は社会状況の強い間接的な影響の下にある．そして更にこの影響は，この様な宗教運動が強力な共同体を形成し，その信奉者たちに単なる救いの説教以上のことをも行なわなければならない場合，つまりこの運動が信奉者たちに地上の戦いの時の間，居住地を提供しまた救助活動を行なわなければならない場合，社会状況の直接的な影響となる．しかしこの様な運動が自ずから社会の中で一つの社会或いは国家の中で一つの国家になればなるほど，こういう運動は具体的な社会問題にますます強くまきこまれるのを感じるのであり，またこの具体的な社会問題にますます注意と組織力とをむけるのである．しかしこれらすべては〔キリスト教の歴史的発展のなかの一つの〕結果や成果であり，出発点や本質ではないのである．

イエスの説教の倫理的根本思想

事情がこういうことであると，〔キリスト教の〕一切のものの根底にあるイエスの説教に第一番に》社会的《問題設定を持ち込むということはそもそも誤りである．イエスの説教は明らかに純粋に宗教的な説教でありそして神について並びに人間に関する神の意志についての特定の思想から発したのであった．宗教的な生の価値が彼にとって唯一の財産なのである．宗教的な生の価値のうちに彼の生と思考の全体が現われている．この生と思考が現われることによってこの生と思考とが古代一般においてと同様後期ユダヤ教の純粋に宗教的なるものへの転向を証明している．政治的並びに社会的解体は古代の現世内的理想をここ〔後期ユダヤ教〕においても解体しそして内的なるもの或いは超越的なるものへの転向を暗示した．しかしこの宗教思想に社会学的問題設定を持ちこむこと，つまりこの宗教思想から個人と共同体の関係がどの様に形成されるのか，ことごとくの大いなる思想に接続する社会学的構造がこの宗教理念からどの様にして形成されるのか，を問うこと，こういうことは大いに許されうる．そしてここでわれわれはもちろんその特質が宗教的理念の弁証法運動から生じる様な重要なそして成果多きことごとに出会う．

伝承という不確かな資料からではあるが，イエスの説教の根本思想が簡単に認識されうる．〔まず〕重要なのは大いなる最後の裁きを告げること，つまり完成された神の支配の総括としての神の王国の来たることを告げることである．この神の国においては神の意志が，現在では天でのみ実現されているが，地上においても実現され，罪もなければ，悩みもなければ，苦しみもないのである．またこの神の国においては心情と純粋な意志の真の価値がこれらに与えられる栄光のなかで光を発するのである．まさしくそれ故に自分の罪を認識する罪人と苦難と貧困のなかで〔神に対して〕帰依することができまた謙虚になることができる方向へ教育された人たちが満ちたりた人たちや正しい人たち並びに富める人たちや権力ある人たちに先立って神の国へはいるであろう．更に重要なのは神の王国を待ち焦がれそしてその間イエスにおいて神の王国の来たることの保証を持ちまた準備のできている教団の形成統一である．この教団の形成統一のためには使徒という特別な義務が課せられている直接の弟子たちや従者たちのかなり緊密なサークルが役に立っている．彼らの手を借りて〔神の〕王国は四方八方へ宣べ伝えられる．神の王国の状態そのものについてはイエスは思い煩ってはいない．神の王国はまさにあらゆる倫理的並びに宗教的な理想の総括である．こういう理想はこういう場合ひとりでに悩みなきことと結びつけられている．もっと詳しく規定するには個々の報告は不完全でありまた不確かである．神の王国が来たる》方法《と》時《については，まもなく来ると言われているだけである．時機そのものについては彼は純粋に神にまかせたのであった．神の王国が来る》方法《については伝承からははっきりとした見解はもはやひきだされえない．神の王国とは地上における神の支配である．この神の支配という思想に世界の終りと裁きという思想がのちになってはじめて続くのである．しかし両者は非常に密接に関連しておりそして来たるべき王国に対する準備は終わりの運命にとっても非常に決定的であるので，両者の違いと関係についても何もはっきりしたことは教えられないのである．神の王国に対する準備が非常に強調されている．そしてこの準備は非常に徹底的なものなので，神の王国を待ちこがれる教団そのものがすでに先取りのかっこうで神の王国と呼ばれうる．この神の王国という名前でもって特別なグループが結成されようとしているのではなくて，救いへと通じる道と家を建てる基礎となる堅い岩とはできるかぎり多くの人たちに示されるようにと意図されている．

神の王国に対する準備のこの要求のなかにイエスの倫理とこの倫理を制約するイエスの神に関する思想が含まれている．このイエスの倫理やイエスの神に関する思想においてはユダヤ的環境に対する斬新さということについての問いは重要ではないのである．

倫理的な基本的な要求は，簡単に言えば，神に対するあらゆる倫理的な行為における自己聖化(Selbstheiligung)である或いは人々が王国が到来したときに神に顔を合わせる場合の心の純粋さ(Herzensreinheit)である．倫理的命令そのものは実践から並びに普遍的見解からとりあげられる．しかしその様にしてとりあげられた倫理的命令は，それを純粋に内面的に承認して履行する場合，行為はあらゆるものを見通しそして心情の底まで見抜く神の目にさらされているという意味で神の光のもとに置かれるのであり，また本来的な真の生活，生きた魂と永遠の価値を神の前に得るために神に自からを捧げるという意味で神の光のもとにおかれるのである．〔倫理的な命令には〕それ故片や純粋な心情倫理の性格，つまりあらゆる倫理的命令を他の動機や合目的性をかえりみることなく貫きとおすという徹底主義〔がみられ〕，それ故片やまたなかんずくこの行為において獲得される神に対する態度への，この行為において獲得される魂――これは世界よりも重い――の無限の価値への至るところで徹底した関係〔がみられる〕．この思想がユダヤの律法を，一般の民衆道徳を承認する立場によって，また応報の庶民的な期待によって包まれているということはここでは究明しないでおこう．これらの理念全体に対するいろいろな批判の萌芽についてもここでは究明しない

でおこう．主要なことは，この倫理的理想は人間を内面的に見抜きそして良心の命令の形で自らの方へひきよせる神の現在(Gottesgegenwart)という宗教的思想と神に対する自己犠牲によって得られる魂の無限で永遠の価値という思想によって完全にみたされているということである．罪によって苦しんでいる人が正しい人よりも容易に理解できることごと，現世と現世の心配事へとまきこまれていない人が金持やいろいろな世事への思いわずらいによって拘束されている人よりも容易に実現できることごと，世の中の善きものから締め出されている様にみえる貧しき人や小さき人にも救いへの道をひらくことごと．こういうことごとにふさわしいのは神のもとでの人間の価値の価値づけは日常生活における価値づけとは異るということである．

以上でもって福音の倫理の基本的傾向が与えられている．福音の倫理のうちに倫理的要求の特別のリストを求めてもむだであろう．いくつかの要求は，ユダヤ人の生活がそれらを含んでいる様に，自明のこととしてとりあげられる．そしてそれ故全く当然の様に普遍的に人間的な要求とみなされる．福音のなかにはある一つのまとまりもなければ，ある一つの体系もない．しかしだからと言って福音の倫理を純粋に主観主義的な心情倫理とみなすこと，行為に関する自律的にして節度ある良心の単なる要求とみなすことは誤りであろう．何となれば全くとらわれのないかっこうで天国における褒賞について語られているのである．そしてこの天国における褒賞の場合には行為と等価の報償という様なことは問題になっていないのである．真の褒賞は神の王国そのもの，宗教的な完成の目標である．普遍的な意識からとりあげられた要求のなかには段階がつけられているということ，倫理的な教えは特定の点に向けられているということ，これらのことは全く明白である．その結果福音の倫理は単に意志の形式或いは内面的な良心的必然性の動機を暗に示しているのみならず，特定の，具体的な要求を暗に示している．福音はあらゆる道徳的な意欲の中心に神思想を置くことによって具体的なそしてきわめて特徴的な方向を受け入れている．予言者の信仰の意味で生ける行動的な意志であるのは，また予言者の信仰によってその心髄までとらえられた人間を自分の創造と意欲のなかへひきこむのは，人の心底を徹底的に探り，一切のものをすみずみまで，またきわめて精巧な自己欺瞞をもみぬく神である．だからあらゆる徳は宗教的な根本目的から，つまり神の意志に一致しまた神の業に協力するという目的から，一般に組織化されるのである．神への従順ということを通して神に対して自己聖化を，自己犠牲を並びに自己献身を最も明白な形で行う人たちが現われ，そしてこの人たちが指導権を獲とくする．自己を形成するという方向ではまず第一に完全な純粋さと誠実さの徳がある．この徳においてのみ全知的な聖なるひと〔つまり神〕との結びつきが可能となる．この徳に続くのが行為に関しての良心的な節度である．更に神の前で人間の微小さを自覚し，人間の罪を他人のせいにすることを許さない謙虚の徳がある．また自己否定の徳がある．この自己否定の徳において，自己愛，享楽欲，安楽，神と結びついた倫理的な要求の厳しさに対する人間的な同情が断念されなければならないのである．イエスは物質的幸福(Glück)やお金に依存しないことを要求する．性的な自制を要求する．心情の内面化を要求する．人格性の統一のとれた基本的方針を要求する．ここで福音はきびしい徹底主義に至る．福音は禁欲(Askese)ではない．しかし実行可能性に関するあらゆる制約を無視するきびしいものである．しかしその際無邪気な生の喜びは決して破られてはいない．他の人間に対する関係という方向においては全く同じことが妥当する．この種のあらゆる倫理的行為は，神の業に則して働くという観点，われわれにおいてとりあげられる真の神の心情の啓示という観点，われわれの行為における神の本質の啓示による真の神認識に対する感覚の覚醒という観点，これらの観点の下へ置かれる．神は活動的な創造的な愛でありそしてその光を善き人たちの上にも悪しき人たちの上にも照らされる様に，神に捧げられた人間はその愛を友にも敵にも，善き人たちにも悪しき人たちにも，知らしめなければならず，あり余るよう

な愛によって敵対感情や反抗心を克服しなければならない．あり余るような愛こそが他人を恥ずかしがらせまた愛に対する理解を覚醒するからである．この愛の業と結びつけられるのが温和，他人を許す心構え，他人に奉仕する心構え，人間関係における心情の温かさ，他人との関係における持続性と首尾一貫性，高潔，つつましやかさ，協調性である．ここにも具体的な動機なしにまたいわば〔ただ〕準備として，自然的な人間の難行苦行のために自己の制限を要求するところの禁欲というものは存在しない．存在するのはほとんど超人間的といえるものを要求するところの厳しさと大衆並びに功利的理性のにぶい抵抗を破ることができると確信している理想主義だけである．その他の共同体的な生活関係そのものは触れられないままである．その他のすべての徳，つまり自己制御と自己改造の要求や公平，正義等々の要求は上述の主要な要求の背後に後退し，多かれ少なかれ偶然的にしか触れられない．その他すべての徳はおのずから次の様な基本的傾向に順応するのであろう．つまりその基本的傾向というのは神を愛するという二重の命令のうちに，即ち片や神の命令に従うという形で神に自らを捧げるという命令と，片や隣人を愛するつまり隣人との交わりのなかで愛という神の心術を啓示し或いは覚醒するという命令，この二重の命令のうちに存するのである．

訳出に際して

1　テキストは1922年にJ. C. B. Mohr(Paul Siebeck) から出版された版を，1961年にSCIENTIA AALENが写真版の形で増版したものを用いた．

2　原文中のゲシュペルトつまり隔字体の部分は訳文に傍点を付したかったのであるが，本紀要の仕上りの活字の大きさの関係上省略した．

3　原文中の 》……《 は訳文においてはそのままにした．

4　原註は厖大な量にのぼるため，今回の訳出ではすべて省略した．

5　訳文中の〔……〕は訳者が便宜上つけたものである．

6　訳者の判断で便宜上改行したところが二，三ヶ所あるが，特に断わっていない．

7　上記でもって第1章第1節の約半分余りを訳しおえただけである．事情が許されるかぎり，訳業を続けたいと思っている．